



大西 啓義さん

(おおにし・ひろよし)

昭和18年、加古川市生まれ。36年卒。神戸大学経済学部を卒業後、日清紡に入社。ブラジル子会社設立などに携わった後、退職。ソフト会社役員を経て58年に人材開発会社アクティブビジネスを設立。東京都大田区在住。

# 談 い て わ れ ら 同 窓 生

## 兵庫県立加古川東高校

歴史や人間教育もあれば満点

大西啓義さん

よき伝統を忘れずに新しい時代に逞しく！

今田忠彦さん

まじめに努力を続けよう

井上陽二郎さん

兵庫県立加古川東高校は一九二四（大正十三年）年、旧制県立加古川中学校として加古川市加古川町粟津に開校した。四八（昭和二十三年）年に新制高校に移行、現校名となった。「自治創造、明朗親和」を校訓に、知育・体育・徳育の調和のとれた心豊かな人格の形成を目標としている。「授業第一主義」の伝統は今も受け継がれ、県内有数の進学校として知られている。OBは歌手の菅原洋一さん、トッパンフォームズ会長の福田泰弘さん、東京都副知事の竹花豊さん、弁護士住田裕子さんら。今回は、首都圏を拠点に活躍中の三人に往事の思い出を語ってもらった。

——高校時代はどんな生活？

大西 僕は平岡の田舎だったから、加古川へ出るとなると大都会に出る感じだったね。自転車です通っていましたが、国道は未舗装の部分がずいぶんありました。一番記憶があるのは、柔道の寒げいこ。冬の朝早くに行かなきゃいけないから寒かった。凍るような中でボタンボタンと。寒げいこは柔道か剣道

かどちらかが必須。旧制中学が男子校だったから、その流れですね。質実剛健でした。

今田 寒げいこが終わると柔道の試合をやるんです。三十人ずつのクラス対抗で。私は先ほうで六人抜きました。一人抜くと鉛筆一本くれたので、六本を胸ポケットにさしていました。僕を含む三人で十八人抜いたのに、最後は（チームは）負けた。だめだったなあ（笑）。

井上 私は腕力に自信がないからためでした。「何となく楽そうだ」と剣道を選択しましたが、朝の板の間が本当に寒くて（笑）。私の場合、同じぐらい下手な者と示し合わせてやっていた。私が「ヤーツ」といったら、腕を上げてもらってほんと腕を打った。これが合わない腕にバシッと当たって痛いんですよ（笑）。こうやって普段の授業はごまかしていました。でも大会ではせめて一人は抜きたいと思いい、「ヤーツ」とうまく声と腕を合わせて打ちました。すると一本取れた。あとは相打ちばかりで時間稼ぎ。そして一人抜いた

んですよ。うれしかったですね。

大西 名物先生もおられたね。化学の坂田重夫先生とか、音楽の土井政子先生とか。ずっとやっていた主のような先生がいた。そこから菅原洋一さんが出てくる。

今田 谷澤四六先生は厳しさと優しさをあわせ持った硬骨漢でした。漢文と体操だったかな。野球部もみておられた。僕は音楽で土井先生にかわいがられてね。音楽の教科書で解説の文章があるでしょ。それを読むのにも指名された。「今田さんは声がいい。美声だ」って。みんなからは「また今日も読ませられたかな」といわれたけど。

大西 その美声が今、講談につながっているんだよ。僕の勉強会に来たらいつも、彼に講談をやってもらうんだ。先生にほめられたっていうのはずっと残るんだね。

今田 「あなたお声もいいし。でもちょっと音程が狂いますね」と（笑）。

大西 だから講談へいったんだな（笑）。井上 しかしこれだけ年が離れているのに、



井上 陽二郎さん  
(いのうえ・ようじろう)  
昭和24年、小野市生まれ。  
42年卒。東京大学法学部を卒業後、郵政省に入省。電気通信行政や郵政事業などに従事し、東海郵政局長を最後に退職。現在はNTTドコモ執行役員丸の内支店長。東京都杉並区在住。



今田 忠彦さん  
(いまだ・ただひこ)  
昭和18年、明石市生まれ。  
37年卒。東北大学法学部を卒業後、横浜市役所に入庁。財政部長や総務局長などを経て退職。現在は横浜市教育委員、横浜市リハビリテーション事業団理事長など。横浜市港北区在住。

同じ先生に教わっているんですね。

今田 それと地域が東高を誇りに思っている、というのはありました。今は文化祭で街の人の作品も展示するそうです。地域との一体感というか、今も大事にされているのでしょうか。この前の運動会では二十人も来たと言いました。運動会で記憶があるのは、生徒主体だったということ。他のことは割合、先生がうるさかった。何かあると職員室に呼ばれ、「君、態度が悪い」とやられた(笑)。

大西 丸刈りに帽子をいつもちやんとかぶるまじめな学校だった。

——故郷についてどう思われますか  
大西 今は人口二十七万人ぐらいでしょ。神戸製鋼がきて、すっかり変わっちゃった。別府の方に行くと、昔は浜の宮の松林があり、臨海学校で泳いだり、ハマグリを取ったりしていた。それがなくなっちゃった。

井上 多木化学の横あたりに海水浴場がありましたね。そこまで行ったことがあります。私は妻も小野ですから、年に一、二回帰っています。そのとき車で加古川の街を通ります。が、ほとんど変わりますね。

大西 昔からのお店はそのままあってほしいね。「翁介」のラーメン屋とかうどん屋とか、いろんな独特な店があった。

井上 古い店がほとんどなくなっています。とくに寺家町がそうで、すごく寂しい。加古川中へ通っていたころ、帰りは寺家町を抜けて帰っていました。商店街がさびれていくのは、厳しいものがありますね。

大西 思うのは、加古川や播磨の歴史、風土記など、古いものを学校で学んでいない部分がある。教信寺とか鶴林寺とか、そういう古いものの意味するところとか、地元の人とかがほとんど教えられていない。自分も今、「勉強したい」と思っているぐらいです。

井上 僕は加古川がものすごく好きで、浜手の人の気風がさっぱりしていいんですよ。ぐずぐずいわない。だから、本当に悪い、政治家的な悪いことをやる人はあまり出ないような感じはしますね。

——当時の授業の様子は

大西 科目が多く、真剣に受けました。みんな勉強をよくやる学校だった。大体二年次で、三年次の勉強を終わらせるぐらいのペースでどんどん進めていたね。

今田 勉強をしに行く学校でした。大西 成績別で席次が張り出されるんですよ。クラス分けで、それで分かるんです。成績の何番から何番までが一組と。

井上 「勉強しろ」とはいわないけど、「勉強をするところだ」という雰囲気があった。それで成績については「いい」「悪い」とはつきりいわれて。でも、あまりきついという感じはなかったですね。

大西 男女はクラス別々でした。男が四クラスで、女が三クラス。全部別です。

井上 私るときはちよつと違いました。入試の事情があって、男六、女四ぐらいでとる予定だったのが、(男女で)点数が違いすぎたので比率を変えたんですよ。すると男女混合クラスを一つ作るざるをえなくなりました。五十何人いて、女生徒が十六、十七人という変則的な混合クラス。だから教室の壁の端に女性が必要で、後は圧倒的に男だった。

今田 今でいう男女関係なんてのは、中には当時そういう人がいたかも知れないけど、そんなの関係ないのが当たり前だったね。話をしようなことがあったかなあ。

井上 クラスが違うとほとんど話すことはなかったですね。もてるとかもてないとか、全然そんなのなかったですよ。女の子の横に行ったら、口なんか動きます(笑)。

大西 うぶなのがが多いんですよ。

今田 でもやっぱり若き日だから、いろんな思い出がある。あこがれの彼女が来た、となると友達同士でつつき合ってた(笑)。

大西 僕らの年次から少し後ぐらいに、神戸大の入学生は姫路西と加古川東が一位、二位を争うようになりました。僕らのときは神戸高や兵庫高が多かったけど、偏差値を上げる教育はずいぶんやっていたと思う。

今田 東高が受験勉強をするところだというのは、何となく地域の中ではぐくまれたものがあつた。ただ「自分自身がどう生きるのか」というような、掘り下げたところまで求めはしなかった。それを求めてこたえられるほどの生徒もいなかった(笑)。

大西 文武両道で運動も頑張っていたから、そういう要素が入ればいいことないけど、知育、徳育、体育というでしょ。知育と体育はあつたけど、徳育の面がね。まあ、他の学校に比べればあつた方かもしれない。

今田 礼儀作法なんかも、いわれなくても割合きちんとしていた。暗黙のうちにそういう雰囲気があつたのかもしれないけど、——最後になります。高校時代に得たものが、今までの人生で生きたことはいくらか。

今田 多少まじめで堅実な学校だったというの、自分がいかに加減になっていないところに出ているのかも分かりません。それに東京都副知事の竹花さんとか、東高出身者が頑張っておられる話を聞くと、自分も一生懸命やろうという気持ちになります。

大西 同窓生の頑張りが刺激になっている面があります。

井上 中学校から加古川に出たあの時代が基礎を作っているのは間違いないですね。とにかく一生懸命ちゃんと受験勉強やりました。ひたすら没頭してやれたというのは、大事なことだと思います。何につけても、ずっと集中してやっていたかといかないです。そういうことをしっかりやれた、またそんな学校だったのは間違いないですね。

——校訓そのままに、明瞭でさっぱりと本音を言い合える楽しい談話となりました。

